

う少し掘り下げて、まとめて一カ所にして深く議論すれば本書に立体的な厚みを加えることができたはずだ。なぜ、「脱西洋」を標榜しながらも、ベトナムは「オペラ」という西洋の言葉を選んだのか。そもそも西洋独自の文脈と伝統に根ざしている「オペラ」の定義が非西洋圏へと適応することが可能なのか。ベトナムの「オペラ」を語るのであれば、「オペラ」という語の選択や語彙論的な調査は疎かにすべきではないだろう。このあたりは、急がず、もう少し時間をかけて博士論文を整理し直し、再構築していく必要があったのではないかと。

読了後、評者が再認したことは、ベトナムの20世紀の文化を研究することの難しさである。越・露・仏・中・米という複数言語アプローチだけでなく、きわめて複雑な経過をたどった植民地化と脱植民地化の状況を見極めつつ、不足している資料を他言語資料や近接領域から補い、最新のポストコロニアル思想にも目配せをすることが求められる。

以上、複数の批判点を挙げたものの、本書は、わが国では本格的に研究されていなかったベトナムのオペラについての多くの知識を読者にもたらししてくれる書物である。高度なベトナム語運用能力を具えている著者の今後の研究に期待したい。

(二村淳子・関西学院大学経済学部)

内藤直樹・石川 登 (編). 『四国山地から世界をみる——ゾミアの地球環境学』昭和堂, 2024, viii+338+ivp.

2010年代以降、当初商業美術や建築学の分野で注目されるようになった“foodscape”（食の景観）という概念は、食習慣や、フードシステム、観光、関係人口などに関連した人文社会科学分野へと広がっていった。フードスケープにおける地域固有の資源と地形、それらを活かすための建築を記録した正田〔2023〕は自然の中に人の営みがかかわることによって生み出される風景に尊さや美しさを感じると評しながら、一方で生産に用いる治具がコンクリートや樹脂などに更新され新しいフー

ドスケープをつくっていることにも言及している〔正田 2023: 214〕。本書の執筆者でもある真田〔2023〕は自身の経験から、いわゆる「農村風景」と聞いて思い浮かべるのどかな風景を「美しい」、そのイメージと異なる「生活や生業のありよう」を反映した風景を「美しくない」と判断することへの疑問を呈した。2005年に制定された「景観法」における「美しさ」の決め方は、「人びと、しかも『現在、その地域』という限定された人びとの合意による美しさ」であり、地域の風土に適した農業と切り離された景観であっても「人本位」の評価軸で「美しい」とされることを指摘した。持続可能な環境のためには「環境本位」、農村の経済活性化のためには「人本位」の評価軸が求められ、両者の「美しい風景」のずれを一致させることの重要性を強調した〔真田 2023: 40–46〕。

果たして我々は、「更新された治具」や「生活や生業のありよう」も含めた農村景観をいかに捉え、未来の在り方を考えればいいのか。この課題に対し多くの示唆をもたらすのが序章と終章を含め全21章からなる本書である。

本書の構成は以下のとおりである。

序章	ゾミアの地球環境学とは何か——四国山地から世界を見る
第Ⅰ部	地質と人間——動く大地とともに生きる
第Ⅱ部	微生物と文化——〈おいしい〉をつくるつながり
第Ⅲ部	森と近代——景観を生み出す統治と流通
第Ⅳ部	山村の未来——他者とともにある景観
終章	日本の地域を見ることの面白さ——東南アジアで再発見する四国

本書でいう「景観」とは「人間・異種生物・物質の存在や、それによる活動といった複数要素の集合体」(p.3)とされる。序章(内藤・石川登)では、山村景観の成り立ちを理解するために、同時代だけでなく「過去や未来に属するものも含めた複数の存在からなる『生きた』、『変わりつつあ

る』景観」(p.3)を捉えようと試みており、その動態を捉えるためには複眼的な視点が求められることを主張している。加えて、時間スケールにかんする分析アプローチも提示される。例えば植林事業とは、「不変のもの」にも見える大地、植えられた樹木、商行為を営む人間、それぞれの時間をすりあわせることに他ならない。これらの試みにより、「国家や資本の論理による大地や異種生物および人間の管理や操作と、そうした関係性を無化しようとする活動のせめぎ合いの中で、物理的な山村景観が形成される動態」(p.5)を捉えることに本書の狙いがある。

第I部では、まず1章(殿谷)で「日本列島の中でも有数の地すべり地帯」である四国の地形と地質帯が形成された経緯がプレート運動から説明される。2章(石川初)、3章(石川初)、4章(真田)ではそれぞれ道、工作物、棚田や段畑の石積みが描写され、現代の農村景観を構成する(しかし多くが風景に埋没しがちな)それら要素が、「動き続ける大地」に寄り添い生活するための個々人による合理的な働きかけであることが示唆される。また5章(北野・内藤)は鉱床に注目し、特に1890年代から約100年にわたる一地域の急激な経済的・社会的発展と衰退の歴史を描いている。鉱床の形成はプレート運動の結果であるが、鉱物を資源として認識・利用するには文化的価値観と技術体系が必要とされる。鉱床を時代ごとにその価値基準が変化する「地質-文化-社会的な複合体」(p.80)と捉える考え方は、本書で扱われる景観構成要素すべてに適用される視点であろう。

第II部では、加熱した茶葉を微生物の働きで発酵させた「後発酵茶」が取り上げられる。アジア各地の後発酵茶を概括した6章(内野)で述べられるように、日本に現存する後発酵茶4種類のうち3種類が四国山地に残っている。7章(堀江)では微生物が「なぜそこにいるのか」を考えることにより、特殊にみえる後発酵茶生産工程の類似性は微生物にとって「心地よい環境」を提供し増殖させるための必須の工程であることを指摘した。8章(山口)では作物であるチャの形態と遺伝的組成から四国に自生するチャの系統が推測され、本来自然更新に適していない四国山地に独特な在来

のチャがみられることが理解できる。9章(今石)・10章(磯本)では後発酵茶を含む「晩茶」の作り手に視点が移される。きわめてローカルな家庭の味であった晩茶の持つ換金作物としての価値の変動は、世帯レベルの景観変化や仲買人・茶商・県内外の消費者との関係性を生み出してきた(9章)。人々は晩茶生産を他の生業と並行して行われる季節的な生業として、既存の用具を改良・転用し作業の一部を動力化することで、「ほどほどに労働負荷を下げ、あまり無理のない量」の生産を維持してきた(10章)。

第III部は森林景観を軸としている。11章(赤池)は中世にはすでに良質な木材の産地として関心が寄せられていた天然林地帯をめぐる統治と、積極的な植林事業への転換を促した林業技術の発展について、林業史の観点からひもといている。12章(町田)では「林業地帯形成」以前の社会生活を、「切畑」として検知帳に登録された山の用益と、それらを管理する村落内最小コミュニティである「株」の形成・変遷に着目しながら検討している。13章(田中)では和紙原料(コウゾ・ミツマタ)栽培を中心とした生業の変遷・衰退を軸に集落の地域史を記述した上で、ミツマタの持つ「人工林に替わる新たな山」の創出に寄与する資源としての潜在性を提示している。14章(増田)では社会情勢を反映する木炭生産の「質と量」の変遷と、生産工程の分業化によって生業と景観が切り離されている現状を論じた。15章(岩佐)では木材運搬に用いられた森林鉄道の歴史を振り返り、森林鉄道が本来の用途以外でも活用され人々の「ありふれた暮らしの風景」の一部に組み込まれていたことを、鮮やかな思い出の語りとともに描き出した。

第IV部は四国山地の「未来」に目を向けている。16章(鎌田)では、四国山地の山頂や稜線部に広がる草原の喪失(森林への遷移)は単に景観の変化だけでなく、地域に蓄積されてきた在来知の消失にもつながると懸念している。17章(内藤)では2018年に世界農業遺産に認定された「にし阿波の傾斜地農耕システム」の特徴を解説し、崩れ続ける土地に対する人々の絶え間ない働きかけが「生きている遺産」を形作っていることを示した。同時に、現在我々が観察できる山村景観は近世か

ら行われてきたプランテーション的な生産システムの影響が累積した歴史的空間であるとし、その存在は過去の累積だけでなく「未来」の像を示していると提議した。18章（市川）は、各章で扱われた地域史・社会構造・技術・生業を、ある地区の人々の暮らしという時空間スケールで捉え直している。Uターン者や関係人口の存在により、地域に残る価値観を維持しながらも新しい景観を生み出す様子も記述されている。19章（安藤）はツキノワグマと人間との関係史をたどり、そもそもそれほど多くなかった生息数に森林開発が大きな影響を与えたことを示した。1980年代に入り突如保護対象となったツキノワグマに対する地域住民の試行錯誤の結果が、地域外から「ツキノワグマとの共生」として評価されるなど、新たな価値観による思わぬ形の地域再生・創生の可能性も生み出されている。終章（片岡）では、東南アジアを見てきた目で日本を見直すことによる新たな発見を通し、日本と東南アジアの並行関係を論じる価値を見いだしている。神仏習合や山地国家の特徴は「東南アジアのユニークさの例」として引き合いに出されがちだが、東南アジアの調査経験から中近世の四国を「逆さ読み」することで、両者だけでなくより広い世界の共通性を論じる可能性がひらけるとしている。

内容を概括するだけでは異なる専門分野の成果が集められた印象を受けるかもしれないが、全体を通すことで読者には本書が提示した3つの視点、つまり「景観の動態を複眼的に捉える視点」、「景観形成にかかわる諸存在の可視化」、そして「分野を超えた広い視点」が与えられていることがわかる。例えば1章はプレート運動により形成された地質・地形を解説しながら、視点を現代の集落群に向け、集落の位置や食文化、また日常的な土地に対するケアと、地形・地質との関係性を指摘している。また、「コエグロ」と呼ばれる肥料とその原料であるススキ（カヤ）、現金収入源であったチャ（茶）やコウゾ、ミツマタといった要素は、それらを主題とする章以外にも場所・時代・分野問わず頻繁に描写され、野生生物ではツキノワグマ以外にもイノシシやサルが近年の新たな景観の

構成要素として登場する。特に注目すべきは7章であり、四国山地をいわば「微生物からみた景観」に置き換えたことで、各地域における後発酵茶生産が似ているように見えるのは「微生物学的必然性」の共通性によるものであり、それらは各地の風土に適応し独自に進化したものである可能性を提示した。換金作物としての阿波晩茶の流通・消費を捉えた9章の成果と合わせ、これまでその特殊性ゆえに単体で扱われがちであった後発酵茶を景観・山村文化をなす一要素として再構成したことの意義は大きく、「諸存在の可視化」の有効性が明示されたといえる。

このように本書は、ある一時代・一地点の岩石にピントが合ったかと思うと、それは時代を経て石積みとして利用され、その石積みで作られた棚田の横を森林鉄道が走り、その鉄道に「便乗」していた人々がその思い出を語り、見上げた先には人手が入らなくなった植林地が広がり、その山には微生物が浮遊している、というように、いささか抒情的にすぎる表現であると自覚しているが、四国山地をミクロ／マクロなレベルの、時間も超えた、膨大なレイヤーの積み重ねとして捉えている。

本書のサブタイトル・序章タイトルにある「ゾミア」に関しては、四国山地＝ゾミアか否か、という点で関心を集めるだろうが、その評は主題ではないと考える。序章で国家による統治からの逃避的性格を有しながら、資源や商品の生産地でもある、さまざまな地質・生態環境・時代において一定期間創出される場所を「ゾミア的空間」と定義したように、また「あとがき」で「ゾミア、すなわち『山地』をあくまでも出発点の『コンセプト・メタファー』としながら山地に関する新しい議論」を試みたと述べられているように、「ゾミアの地球環境学」とは「ゾミア論」を援用することで山地景観の捉え直し、特に「近代化・効率化を価値軸とした場合の『条件不利地域』」[真田2023]とひとくくりにされてきた山地を、山地の論理から再文脈化しようとする挑戦であると考えられる。

本書は、これから山村景観やその形成にかかわるアクター（有機・無機にかかわらず）の調査を

行う学生・大学院生がそれぞれの分野を軸としながら地域を重層的に捉えその動態を地域史・研究史の中に位置づけようとするとき、多くの示唆を与えるだろう。さらに、今後も同様の視点・アプローチによる景観研究が蓄積されることで、本書では抑制的に触れるにとどまった、人々の誇りや価値観を内包した日本山村の景観の「未来」の在り方が描かれることを期待する。

(佐々木綾子・日本大学生物資源科学部)

参考文献

- 真田純子. 2023. 『風景をつくるごはん』戸田：農山漁村文化協会.
正田智樹. 2023. 『Foodscape フードスケープ 図解 食がつくる建築と風景』京都：学芸出版社.

新倉久乃. 『在日タイ女性の高齢期と脆弱性——トランスナショナルな社会空間と埋め込まれたジェンダー規範』明石書店, 2024, 252p.

今や様々な形で日本に来て働くアジア系移民は、私たちの日常風景の一部になっている。しかし彼らの生活の実態、本国との関係や彼らにとって将来に向けてどのような選択が可能なのか、同じ国で生活しているにもかかわらず私たちはほとんど想像も及ばない。2022年に提出された博士論文をもとにした本書は、在日タイ女性を対象に、こうした点について、その原因や問題点とともに明らかにする。主たる資料は2016年10月から2021年11月の期間に実施された調査において収集されたデータだが、その背景には著者がNGOなどの支援活動を通じて長く在日タイ人の人身取引被害者や生活困窮者のための福祉や生活相談に関わってきた経験がある。

本書の目的は、在日タイ移住女性が高齢期を迎えるにあたり、どこでどのような条件のもとでどのような高齢生活を選択するのか（できるのか）を論じることである。そのために日タイの越境的な家族関係の実情、両国の家族において女性たちに期待される役割の相違とともに、日本における

福祉や在留資格の諸制度がもたらす制約を明らかにし、それらのために選択肢なき選択をせざるを得ない状況があることを描き出している。主たる調査対象は、1980年代から90年代にかけて来日し、壮年期に生活困窮を経験した15名の在日タイ女性たちである。著者は彼らに対して複数回のインタビューを行いつつ、その活動や生活場面に参加し、内1名についてはタイへの一時帰国に同行したほか、制度面の情報収集も行った。

本書は序章・終章および7つの章で構成される。序章では、目的や調査について説明したうえで、本書の分析・理解に直接の示唆となった先行研究や論点が紹介される。移住女性労働者をめぐる「ハードな」経済的、物理的、法的な制約の一方で、ジェンダー役割をめぐる規範の解釈や意味の再構築などが可能な「ファジーな」制約があることが指摘される。先行研究の紹介を通じて明らかになるのは、日本における移住女性の高齢期に向けた経済的な脆弱性やそのなかで可能な選択を論じるという本書の課題が、多岐に広がりをもった問題であるということ、またこうした探究自体が新しい試みであるということである。

まず第1章では、在日タイ人女性の歴史的制度的背景が提示される。1980年代以降の在日移住タイ女性を中心とした在留資格状況の変遷と、彼らをめぐる社会保障や福祉の法的制度が紹介される。この時期に来日したタイ人移住者は、日本人と婚姻関係を結ぶことによりその後永住者となる者がある一方で、DVや離婚等の挙句に貧困を経験しつつ単身で子を育てた定住者もいる。日本の諸制度には、子は母が育てて当然で（「母子一体」）、父親が主たる稼ぎ手であるべきとする家父長的ジェンダー規範が埋め込まれており、これが彼女たちの選択に大きく影響することが述べられる。

第2章では、在日タイ女性の日タイそれぞれにおける立場や関係性、それを理解するための概念枠組を提示している。彼らは両国に家族を持ち、タイ側では娘として母として拡大家族への責任と、親や育ててくれた人の恩（ブンクン）を返すことが期待され、日本側では妻として母としての役割が強調される。両国の家族それぞれにおける役割を時と場面に応じて複合的な背景のもとで選択し